

三浦市立南下浦中学校

研究テーマ：教師の個別最適な学びとしての探究的な研究

1 実践の目的

(1) 理論

Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは劇的に変わる状況が生じつつある。学校現場でも GIGA スクール構想による一人一台端末の導入など、大きな変化が起こっている。こうした中、『「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）』（令和3年11月15日、中央教育審議会、以下「審議まとめ」）では、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師について次のように述べられている。（引用部分における下線はすべて筆者が付したものである。）

「Society5.0 時代」が到来しつつあるなど、大きな変化が生じている中で、教師が、時代の変化に対応して求められる資質能力を身に付けるためには、養成段階で身に付けた知識技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、求められる知識技能が変わっていくことを意識して、教師が常に最新の知識技能を学び続けていくことがより必要となってきた。

このことから、これからは、教師自身が時代の変化に応じた資質・能力を身に付けることが求められており、そのためには教師自身が学び続けていく必要があると考える。

では、教師はどのように学んでいけばよいのだろうか。「審議まとめ」では、教師の

学びについて次のように述べられている。

教師自身が、新たな領域の専門性を身に付けるなど、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて強みを伸ばすことが必要であるが、教師の学びに充当できる時間が限られている中であって、こうした強みを伸ばすための学びは、およそ教師として共通に求められる内容を一律に修得させるというものではなく、より高度な水準のものも含め、一人一人の教師の個性に即した、個別最適な学びであることが必然的に求められる。

つまり、校内外での研修だけではなく、教員一人ひとりが課題や興味関心に応じて学んでいく教師の個別最適な学びが必要であると考ええる。

(2) 今年度の研究

これらを踏まえ、急激に変化する時代の中では、教師自身が自ら主体的に学ぶ力を身に付ける必要があると考え、今年度は、「教師の個別最適な学びとしての探究的な研究」を校内研究のテーマとした。具体的には、教員一人ひとりが、自分の興味関心や課題に応じてテーマを設定し、研究の方法を計画して実践する。設定するテーマは、過年度の研究・成果を踏まえ、教科指導に限定した。また、これまでの研究で培ってきた教員同士のコミュニケーションを活かし、個へ

の埋没に陥らないよう、協働的な学びも取り入れながら研究を行うこととした。

2 実践の内容

(1) 教員一人ひとりの興味関心や課題意識の明確化

4月から5月にかけて、全教員にテーマ設定・グループ分けに向けたアンケートを実施した。【図 1】

あなたの研究テーマの設定に向けて次のことについてお考えをお書きください。

教科授業における自分の課題、教科授業で変えていきたいところ、教科授業において関心があることなどは何ですか

回答を入力

前述したことがらに最も関係するのはどれですか（自分が研究したいテーマはどれが近いですか。これがグループになります）

☐ 知識・技能

☐ 思考・判断・表現

☐ 主体的に学習に取り組む態度

そう考えるのはなぜですか（任意）

回答を入力

【図 1】

このアンケートをもとに、一人ひとりがテーマを設定していく。また、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、教員同士で協働しながら進めるために、3つのグループ分けを行った。（「知識・技能グループ」「思考・判断・表現グループ」「主体的に学習に取り組む態度グループ」）

また、研究推進委員がそれぞれのグループのリーダーを務めることとし、グループのファシリテートを担うこととした。

次の【表 1】はアンケートの回答の一部である。

(2) 教員一人ひとりの個に応じたテーマ設定に向けた研修会の実施

千葉大学教育学部の古谷氏は、2020 年に小学校の校長として「教員の個別最適な

学び」という形で校内研究を実施している。

教科	自分の課題、教科授業で変えていきたいところ、教科授業において関心があること	グループ
保健体育	I C T の活用、種目の軸となる動作の習得	知識・技能
数学	授業での必須指導内容と家庭学習の在り方	知識・技能
国語	グループ学習	知識・技能
美術	生徒が興味関心を持って取り組むことができる題材や指導方法について	思考・判断・表現
英語	英語を書くことを苦手とする生徒が多いので、Writing の力を楽しまつつけるにはどうしたら良いか？	思考・判断・表現
英語	即興性。既習文法を用いて、自分の考えを英語で表現すること。	思考・判断・表現
理科	I C T の活用	主体的に学習に取り組む態度
社会	生徒が主体的に学習に取り組む至誠	主体的に学習に取り組む態度
国語	主体的な学びの実践と評価、また学習の主体性は定着するのか	主体的に学習に取り組む態度

【表 1】

そこで、本校では6月に古谷氏を講師として招き研修会を行った。研修会では古谷氏から今求められている「主体性」、「個別最適な教師の学び」についてご講演いただいた。その後、今後の研究に向けて研究推進委員をリーダーとしたグループに分かれ、現在考えているテーマ案について協議した。



【写真(研修の様子)】

研修を終えての教員の感想の一部を次に示す。（下線はすべて筆者が付したものである。）

これらの感想から、この研修会を通して「教師の個別最適な学び」の意義を実感できたことが分かった。

(3) 教員一人ひとりの個に応じたテーマ設定に向けたグループ協議
4月から5月に行ったアンケート、6月の

○自分は主体的に学習に取り組む態度を研究テーマにしようと考えていたので、主体的と自主的の違いを学べたのが今後の自分に役立つそうだと感じました。

○生徒、教師変わりなく、学ぼうとする姿勢が大切であること。研究の手法は、授業改善にも役に立つこと。

【感想の一部】

講師による研修会を受けて、7月に教員一人ひとりの研究テーマの仮決定に向けて研究推進委員をリーダーとしたグループ協議を行った。また、8月には研究テーマの決定と実践に向けたグループ協議を行った。

グループ協議を行うにあたって、研究推進委員一人ひとりが事前にグループ協議のゴールにあたる「1. 研究テーマ」「2. 仮説」「3. 研究計画・研究方法」について考え、「研究計画・報告書」に記入をする時間を設けた。こうしたことで、グループ協議では、研究推進委員がアドバイザーの形をとることができ、教員一人ひとりが、「1. 研究テーマ」「2. 仮説」「3. 研究計画・研究方法」について考えることができた。実際に決定した教員の「研究計画・報告書」の一部を以下に示す。

1. 研究テーマ	知識・技能（特に文法事項や単語）を活用して表現活動を行うための指導の工夫
2. 仮説	1. 教科書を主として学習した知識・技能を使用する無活動を継続的に行うことができれば、知識・技能が定着し、表現力育成の土台となるだろう。 2. 帯活動では、知識・技能を活用する場面を明示できれば、その場面・状況に応じた表現として身につけることができ、その蓄積をもってより確かな表現活動へと繋げられるだろう。
3. 研究計画・研究方法	1. 身のまわりのものを英語で説明する活動 内容：説明する表現の型を短文で示し、生徒が既習事項（接続詞・不定詞・前置詞など）を活用して口頭説明できるようにする。またWritingにも繋げる。 検証方法：ノートの記述、生徒の取り組みの様子を観察、単元テストの分析。 2. 自己表現活動 内容：自身のことについて、知識・技能を活用する表現活動を行う。 検証方法：ワークシートの記述、生徒の取り組みの様子を観察。

【「研究計画・報告書」の一部】

(4) 教員一人ひとりの実践

1学期に立てた研究計画に沿って一人ひとりが実践を行った。授業実践は、一つの

単元の中で行うもの、通年を通して行うもの、特定の生徒に焦点を当てたものと様々だった。

数学	問題解決の共通しをもたせるための指導方法の工夫	単元開始の単元で実施予定（11月頃）	メタ認知能力を育成するための有効な指導方法である「IMPROVE（インプルーブ）モデル」を用いた「問題解決共通シート」を活用した授業を行う。
英語	表現できる喜びを感じ、記憶の定着につなげる学習法について	9月～11月のLesson 5～Lesson 7授業前15分間（以下、内容項目の授業を2コマずつ） 教科書本文と単語をメインとした授業運び	教科書本文と単語をメインとした授業運び (1) リスニング中心の授業と単語の関心度を上げるための授業 (2) 教科書本文と単語の関心度を上げるための授業 (3) スピーキングと本文の一致 (4) リスニングとスピーキングで音声と文字を一致させる (5) リスニングやスピーキングなどゲーム感覚で教科書に頼らずに音声が入っているかを確認する
理科	アンバーポットフォリオ（OPPシート）を活用し、主体的に学習に取り組む態度の育成	通年	各単元のほしきりにあわせて、OPPシートを各生徒へ配布。（生物・化学分野は主に配布済み） 10月中旬に物理の単元のOPPシートの学習前を取り組み始め、そこから毎授業終わりに生徒自身が学んだこと・疑問に思ったこと・生活に結びつきそうなことを記録。 単元の終わりに生徒が物理の単元を通して学んだことを記録させる。
特別支援	生徒に読解力をつけさせる	1年間	日記

【教員の実践計画の一覧より抜粋】

3 実践の成果と課題

講師を招いての研修を行ったことで、参加者はより主体的に、校内研究を自分事として捉えることができた。また、一人ひとりが個別最適な学びに向かい、それぞれの研究テーマを決定し、研究計画を立て、実践することができた。こうしたことにより、自ら主体的に学ぶ力が向上したと考える。

課題としては、グループに分けたことで個別最適な学びと協働的な学びを両立することはできたが、お互いの実践を参観しあうことが不十分であった。

4 今後の展開

今年度の実践による成果と課題の表れを、研究に取り組んだ一人ひとりの教員がしっかりと受け止め、今後の授業改善に生かしていく必要があると考える。

また、学校全体としては、今年度の研究を「研究の初期段階」と位置づけ、次年度は自ら主体的に学ぶ力をさらに高いものにしていくことを目指していきたい。